様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２１年　５月　１９日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2006～2008
課題番号：18500471
研究課題名（和文）　スポーツにおける卓越した「才能」獲得メカニズムの質的分析

研究課題名（英文）　A qualitative analysis of talent development in sport

研究代表者　北村　勝朗（KITAMURA　KATSURO）
東北大学・大学院教育情報学研究部・教授
研究者番号：50195286

研究成果の概要：
スポーツ領域の「才能」は生得的な遺伝的要因によるのではなく練習と指導の過程を経て獲得されるものである点を解明することが本研究の目的である。研究の結果，指導者による練習の意識的な場づくり，指導者・家族・仲間等による選手の自立化を促すかかわり，及び選手の熟達化過程に応じ基礎的な技能から応用的な技能，更には選手の個性に応じた技能の創造に至るまで幅広く展開される指導的な作用，が才能育成において重要な役割を果たしている点が明らかとなった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,400,000	0	1,400,000
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	540,000	3,740,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学　・　スポーツ科学
キーワード：スポーツ心理学

１．研究開始当初の背景

日本における才能に関する研究は国際的な才能研究の中でも立ち遅れており，スポーツ選手の才能発掘の問題や，卓越したパフォーマンスを発揮する選手の育成の問題，更にはエキスパートを育成する指導のあり方の問題等，多くの問題が山積している。

スポーツ選手の才能の開花には多様な因子が相互に影響しあって関与する極めて複雑な現象である。しかし多くの研究は遺伝的な要因の分析結果や生理的な特徴に基づいた分析が主であり，選手の心理的体験の視点から才能が開花する過程を直接解明した研究は皆無であった。したがって，才能を，ある一部の人々に固有な遺伝的特性として捉え，その特性をいかに早期に発見し可能な限り早期に専門的練習を開始し，莫大な練習量を蓄積するといった研究が多く，全ての人々に才能育成の可能性を認める研究は皆無であった。更に，エキスパート選手の親，指導者，環境，等についての研究・調査も事実に関して断片的に行なわれているのみであり，

幼少期からエキスパートに至る全ての過程における才能育成の全体を，体験の質という内面的な視点から一連のシステムとして描き出す研究が求められている。

２．研究の目的

遺伝的要因に規定されるとするスポーツ選手の才能に対する捉え方を払拭し，新たな概念，すなわち環境と練習のプロセスに基づく熟達化理論に立脚し，スポーツ選手の才能育成モデルを構築すると同時に，そうした才能の育成を保障する才能育成システムの開発を行なうことが本研究の目的である。前述したように，日本における才能に関する研究は国際的な才能研究の中でも立ち遅れており，スポーツ選手の才能発掘の問題や，卓越したパフォーマンスを発揮する選手の育成の問題，更にはエキスパートを育成する指導のあり方の問題等，多くの問題が山積している。そこで本研究では，スポーツ選手の才能育成の問題を，下図のように，①選手の技能向上，②選手の意識変容，③選手の親の養育態度，④指導者の指導方法，及び⑤選手を取り巻く支援的環境の変化，の５つの熟達化の要素に基盤をおいた教授学習心理学研究に基づき，今後いっそうのニーズが予想されるスポーツにおける新たな才能育成システムの開発を行った。具体的には，才能の開花に関する研究において最新の理論を提唱しているEricssonによる構造的練習(deliberate practice）理論によって解明された，熟達化における継続的・意図的な合理的練習の構築に着目し，ジュニアレベルからエキスパートレベルに至るそれぞれのカテゴリーにおいて卓越したパフォーマンスを発揮しているスポーツ選手を対象としたインタビュー調査及び行動観察により，熟達化過程における選手の体験の詳細について質的分析を行う。またそれぞれの選手の親及び指導に関わった全指導者を対象としたインタビュー調査及び行動観察により，選手の熟達化に作用する支援的環境要因について質的分析を行う。更には，スポーツ選手の才能発掘にたずさわる人々を対象としたインタビュー調査及び行動観察により，様々な技能レベルにおける才能発掘の問題について質的分析を行う。

３．研究の方法

選手18名（個人競技種目８名，チームスポーツ種目10名），指導者９名を対象とし，熟達化過程の体験の詳細について１対１の深層的インタビューを行なう。具体的には，現在あるいは過去に日本代表選手として国際大会で入賞した選手，その指導者，及び家族等関係者を対象とし，当該スポーツに触れた幼少期から，現在に至るまでの体験について，遡及的にインタビューを行なう。その際，日記，トレーニング日誌，競技記録，大会記録等の資料を参考にしながら，熟達化の過程を詳細に描写していく。また，練習または試合場面をデジタルビデオカメラにより録画し，インタビューの際に用いる。得られた現在の意識状態を手がかりとし，過去の練習場面及び試合場面を遡及的にたどりながら，熟達化過程における練習場面あるいは試合場面での意識状態の詳細についてインタビューにより明らかにする。

４．研究成果

本研究による成果として次の４点があげられる。第１に，スポーツにおける卓越した「才能」獲得過程において優れた指導者が果たす役割として，技能獲得，意識化，及び支援的環境設定の３要素からなるメンタルモデルが機能している点が明らかとなった。具体的には，技能獲得に関しては，選手の熟達化段階に応じ基礎的な技能から応用的な技能，更には選手の個性に応じた技能の創造に至るまで幅広い技能の指導がなされている。意識化に関しては，選手自ら練習課題の意味を理解し主体的に取り組むような関わりがなされている点である。支援的環境設定に関しては，選手との信頼関係の構築やチームビルディング，選手やチームの心身のコンディショニング，メンタリング，物理的環境設定，といった，指導が有効に作用するためのしかけづくりとしての作用である。第２点に，選手の卓越した「才能」は，選手個人に閉じて獲得され蓄積され再現されるといった発想で捉えるのではなく，選手をとりまく環境との相互作用として開かれた過程の視点でとられることが重要な点である。第３に，選手の熟達化段階や個性に応じた指導的かかわりを通して，技能をとりまく文化・社会的価値，や運動の文脈といった幅をもった学習が蓄積されている点があげられる。第４に，指導者と学習者との間で生起する指導的かかわりは，選手との信頼関係の構築といった，指導が有効に作用するためのしかけづくりとしての環境設定が前提となっている点である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　12件）

① 西田保，磯貝浩久，北村勝朗，杉山佳生，伊藤豊彦．スポーツ動機づけの異文化間研究に向けて．健康スポーツ科学研究

32(1). 2009.1-19. 査読有

② Katsuro Kitamura. A Conceptual Model of the Role of Mentoring in the Coaching Process of Expert Basketball Coaches in Japan. International Association for Physical Education in Higher Education Conference Proceedings. 2008. 51.査読有

③ 山内武巳，山崎省一，北村勝朗. 海洋スポーツ型のキャンプ実習が大学生の自己効力感に及ぼす影響. 東北体育学研究 26(1). 2008. 18-27.査読有

④ 北村勝朗，山内武巳，永山貴洋，齊藤茂. 教育情報学研究における質的アプローチの可能性:「教育情報」の解釈と分析の事例から. 教育情報学研究 5. 2007. 19-32. 査読無

⑤ 永山貴洋，北村勝朗，齊藤茂. 優れた少年野球指導者の身体知指導法略の定性的分析. 教育情報学研究 5. 2007. 91-99. 査読無

⑥ 齊藤茂，北村勝朗，永山貴洋. スポーツ選手の練習の「質」を分けるものは何か？エキスパート・スポーツ選手の熟達化過程における練習の「質」の定性的分析. 教育情報学研究 6. 2007. 45-54.査読有

⑦ 北村勝朗. プロフェッショナル・スポーツ指導者のコーチング. 研究開発リーダー 4(1). 2007. 77-81.査読有

⑧ 北村勝朗. 育成年代の優れた指導者はいかにして選手を育てるのか？研究開発リーダー4(4). 2007. 78-82.査読有

⑨ 北村勝朗. 優れた指導者のもつメンタルモデルの質的分析. 教育情報学研究 6. 2007. 7-16.査読有

⑩ 生田久美子.「教える」と「学ぶ」の新たな教育的関係―「わざ」の伝承事例を通して　日本看護研究学会誌 30. 2007. 141-143.査読有

⑪ 齊藤茂，北村勝朗，永山貴洋. 高等学校サッカー選手の熟達化における家族の影響の質的分析. 東北体育学研究 24(1). 2006. 7-15.査読有

⑫ 生田久美子. 「家庭教育」の「復権」とは何か？－「教育」を捉えなおす概念装置としての「家庭」 三田評論 2006 No.1088 . 2006. 23.査読有

〔学会発表〕(計　12 件)

① 北村勝朗，齊藤茂. 指導での挫折経験は優れた指導者の成長に不可欠なものなのか？プロフェッショナル指導者を対象としたコーチング熟達化過程の質的分析. 日本スポーツ心理学会第３５回大会. 2008年11月15日. 中京大学

② 北村勝朗，西田保，磯貝浩久，杉山佳生，伊藤豊彦. 日本，中国，韓国，ブラジルのスポーツ選手の熟達化過程の比較からみる動機づけの特徴. 日本スポーツ心理学会第３５回大会. 2008 年 11 月 14 日. 中京大学

③ 生田久美子. 教育を文化的視座から捉えなおすことの意味:「文化」と「思考」に着目して. 教育哲学会第 51 回大会. 2008 年 10 月 25 日. 慶応義塾大学

④ 齊藤茂，北村勝朗，永山貴洋. 高齢者の運動継続に焦点を当てた専心性（コミットメント）形成過程の質的分析. 日本体育学会第５９回大会. 2008 年 9 月 11 日. 早稲田大学

⑤ Katsuro Kitamura. A Qualitative Analysis of the Talent Development of Elite Athletes in Sport. Asia-Pacific Conference of Exercise and Sport Science. 2007 年 12 月 7 日. Hiroshima

⑥ 生田久美子.「教える」と「学ぶ」の新たな教育的関係:「わざ」の伝承事例を通して. 日本看護研究学会学術集会. 2007 年 8 月 24 日. 別府市

⑦ Katsuro Kitamura, Takahiro Nagayama, Shigeru Saito. Perceptions of Parental Support of High School Basketball Players in Japan. 12th World Conference of European Conference of Sport Science. 2007 年 7 月 12 日. Jyvaskyla, Finland.405-406

⑧ Kumiko Ikuta. Festschrift Symposium on Jane.Roland.Martin’s Works. Changing the Global Educational Landscape: What Does the Idea of The Schoolhome as a Thought Experiment Imply ? The Philosophy of Education 63rd Annual Meeting. 2007 年 3 月 15 日. アメリカ合衆国ジョージア州アトランタ

⑨ Katsuro Kitamura, Takahiro Nagayama, Shigeru Saito. A Qualitative analysis of the Athlete-Coach relationship of Professional Soccer Team in Brazil. 11th Annual Congress of the European College of Sport Science. 2006 年 7 月 6 日, Lausanne, Switzerland , 168-168

⑩ Shigeru Saito, Katsuro Kitamura, Takahiro Nagayama, How do Youth Football Players Construct their Environment to acquire exceptional performance? 11th Annual Congress of the European College of Sport Science. 2006 年 7 月 7 日, Lausanne, Switzerland , 379-379

⑪ Takahiro Nagayama, Katsuro Kitamura, Shigeru Saito. Analyzing expert baseball coaches’ strategy for subjective knowledge. 11th Annual Congress of the European College of

Sport Science. 2006 年 7 月 6 日, Lausanne, Switzerland , 167-167

⑫ Kumiko Ikuta. Toward the New Form of Knowledge-Some Implications from Experiences in the Japanese Performing Arts. An International Conference "W.E.B.Du Bois and the Question of Another World". 2006年6月15日.Tohoku University

６．研究組織

(1)研究代表者

北村　勝朗（KITAMURA　KATSURO）

東北大学・大学院教育情報学研究部・教授

研究者番号：50195286

(2)研究分担者

生田　久美子（IKUTA　KUMIKO）

東北大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：80212744

(3)連携研究者

なし